

徐州戦—敵を侮り、大損害を蒙った、戦略なき戦闘

— 山東省棗荘の退職教師、任世淦さんの「日本国東史郎さんへの手紙」から始まった徐州戦調査から—

福田昭典 ノーモア南京の会

1) 山東省棗荘の任世淦さんからの手紙

2000年8月「東史郎さんの南京裁判を支える会」事務局長、山内小夜子さんの自宅に一通の手紙が届いた。山東省棗荘の任世淦さんから北京の日本大使館宛に出された2000年7月18日付の「日本国、東史郎さんへの手紙」は、なぜか北京の日本大使館を経て、山内小夜子さんの自宅に届けられたのである。なぜだと言うよりは、さすがと言うべきか。その手紙には次のように記されていた。

東史郎が参加した主要な戦場略図

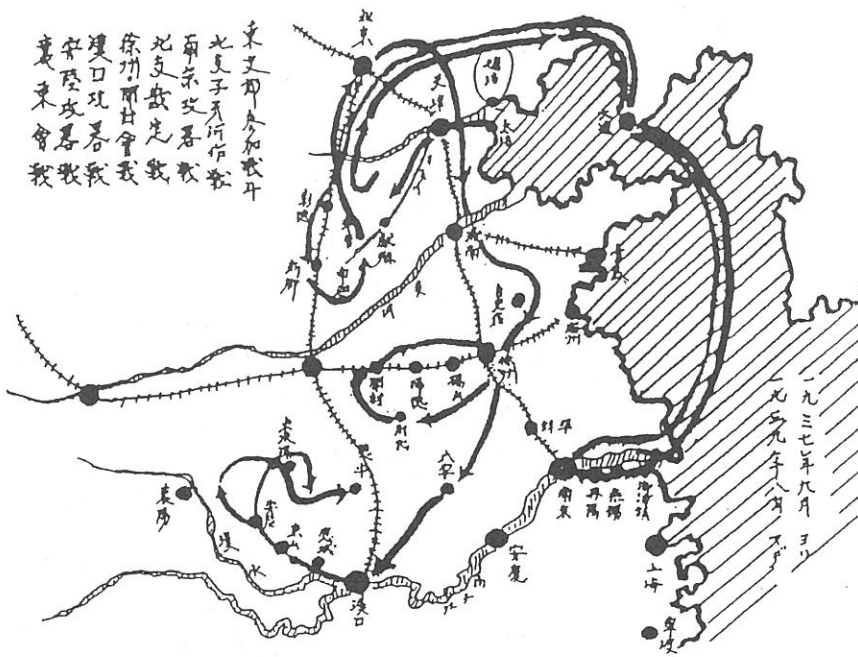


図 1

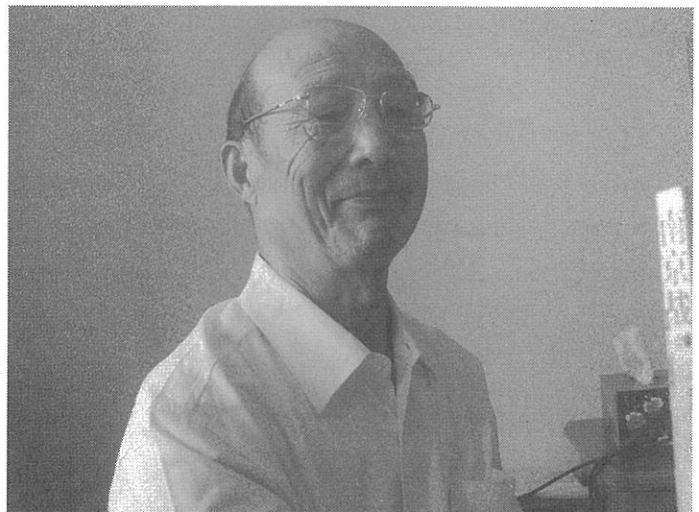
「東史郎日記」

「尊敬する東史郎さん、60年前、あなたはあなたの連隊に従って、徐州戦場に出発する命令を受け取り、私たちの嶧城の西南山区に参戦しました。そのとき、私はまだ物事を何も覚えていない嬰兒にすぎませんでした。母親から、ある時日本軍が「掃討」にやってきて、私を懐に抱いてあわただしく逃げ出し、土壇場で荒れ果てた墓に隠れてやっと生きて帰ることができたと言ったのを聞きました。昨年、私は、幸運にもあなたのあの永い間封印されてきた日記を読みました。これが私の調査活動の「苦旅」に更に原動力を加えてくれたことは間違いありません。私が驚いたことは、日記の中のなんと50数ページにわたって、あなたは私の故郷での軍事体験を記述していることでした。あなたが自ら描いた軍事地図が示す山村の王荘、田村、黄山湖、西匡譚などは、皆私がよく知っている村名です。驚きのあまり、私は直ちに節約して貯めていたお金を取り出し、一度に10冊を買い求め親友に贈りました。

それだけでなく、私は又、地図を見ながら訪ね調べ、あなたが記した多くの物事について、ひとつずつ裏付けを取りました。慎重を期して、私は馬山套や辛莊村を何度も訪ねました。その結果はどうでしたでしょうか。あなたが二度大いに喉をうるおした「清泉」、腹這いになって伏せていた「石陣」、日本の国旗を振った「山の斜面」さらには滝口光夫が誤殺された所、一つひとつの死体を焼いた地点、ひいては田中が他の兵士たちと一緒に井戸の周りを取り囲んで、水を汲み、飲んでいたとき銃撃をうけ、もう少しで撃ち殺されそうになった場所—それは高い土台の上の井戸ですが、それらをすべて調べて確かめはつきりさせました。その他に、あなたが聞いた30匹の軍馬の戦死、あなたが目撃した嶧城近郊で、私たち中国側に撃墜された飛行機、私はみな少しばかり知っています。従って私は『東史郎日記』のすべての内容の真実性を固く信じて疑いません。

被害を受けた側に立てば、主観・客観上の原因から、あなたはあの当時、日本軍の数々の残虐行為に対して十分に明らかにできず、またそれは不可能であったことを指摘せざるをえません。それにもかかわらず、やはり何かを企むことがあって、ある細かな一部を捉えて残虐行為の事実を否定する者がいて、良心に背いてまでもあなたを告訴しました。南京の裁判所の前で発生した出来事を見て、ひどく心が痛み憤激を感じる以外にはその事件の真実性についてはほんの少しの疑いをもちません。

この手紙についてはずっと気にかかっていた。とはいえ自らこの手紙をたどって研究を試みるとか、任さんを訪ねてみようなどという気にもなれず、



私の頭の片隅にあるままだった。ところが一昨年（2006年）の3月京都で行われた東史郎さんの追悼会で山内小夜子さんが、東史郎さんへの任世滄さんの手紙について話されるのを聞き、任先生と東史郎日記についてじっくり勉強しなさいねばという思いに駆られてしまった。早速9月に、ノーモア南京の会の公開学習会で山内小夜子さんから、任世滄さんの手紙と東史郎さんについて講演をいただくことになった。そして山内さんの講演は、私たちの好奇心を大いに刺激し、一挙に私たちを任世滄さんを山東省に訪ねる旅に誘うことになったわけである。

『東史郎日記』の舞台の一つとなった徐州戦について、歴史を若干学習し、8月のお盆休みに山東省棗荘に向かった。上海から空路で、江蘇省の徐州に入った私たちは、翌朝バスで徐州から北上した。江蘇省と山東省の省境に位置し大運河の通る街、台児庄までは一面の大平原を切り裂くように高速道路が走っている。通訳の徐州対外友好協会の郝玉金さんによれば、4月から5月にかけては黄金色の小麦畑の風景がどこまでも続いているそうだ。ところが台児庄を過ぎると道路の左右に石ころだらけの丘陵と平原がおり重なる風景に変わっていく。

棗荘で任先生にお会いし、翌朝さっそく、今は棗荘市に編入されている嶧県に向かった。任先生の故郷は嶧県南西の、まさに東史郎日記に登場する地域、王荘、田村山、黄山湖、西匡譚、馬山套、辛庄村そして白山西。任先生が生まれ育った村々である。私たちを任先生は東日記に沿うように案内してくれた。

私たちは棗荘訪問の按配を江蘇省総工会に依頼した。総工会が徐州市の人民対外友好協会に付き添いと通訳の手配をお願いしたようだ。そして副秘書長、郝玉金さんに通訳として付添っていただくことになった。そのおかげで、戦後は日本人が出入することがなかったであろう嶧県の農村地域に足を踏み入れることができたと考えられる。

その村々で任先生が今までの聞き取り調査のなかで交友関係を築かれている、当時を知る古老たちから証言を聞くことになった。日本軍の殺戮の数々、日本軍の行くところ、いつもつきまとう強姦の事実が、古老の口から語られた。

私たちを驚かせたことは日本軍の強姦により、何人もの女性たちが妊娠させられ、生まれた子供たちは“日本種”と称せられ、今でも何人もの皆さんが存命とのことだった。出産後、家族の手により命を絶たれた子供もいたそうだが、“生まれた子供に罪はない”と育てられた人たちは、任先生の故郷—嶧県南西部の村々で元気に暮らしておられるという。出産した母親、生まれた子供、彼らを取りまく家族。重い十字架を背負って生きてきたであろう彼らの人生に、想いをめぐらすと、改めて胸がしめつけられてしまう。

趙庄村の老人は「ある日、日本軍が襲来してきた。村人は皆逃げたが3人の老婆が逃げ遅れた。村人が村に戻ると、大きな鍋に入れられた3人の老婆の首を発見した」と語った。纏足のために逃げ遅れた老婆を殺害し、しかも首を刎ね、見せしめとして鍋に入れるなど、とても人間のやれる行為ではない。村人が驚き、怒り、悲しみ、そして語り継いできた歴史の事実を、老人は淡々と、戦後初めて出会った日本人である私たちに語った。これらの歴史事実は村々で語り継がれるばかりで

なく、加害の側にこそ伝えられなければならないと、しみじみと実感せざるをえない。私たちの仕事は、何時、どの部隊の、どのような戦争により、そのような戦禍がもたらされたのかという、背景を明らかにすることにあるのではないだろうか。



趙庄村のその老人はその出来事がいつのことであったのか確定できないでいたが、日本軍が再び村を襲うことはなく、村や村の近くに駐留したということもなかったということからすると、3人の老婆を殺害し女性たちを強姦した日本軍は、台兒庄戦で敗走する途上の4月7日、村の近くにある高地—白山西（262高地）を占拠し、2週間ほど駐留していた第10聯隊第一大隊所属の中隊ではないかと推測される。その被害が5月の出来事であるならば、東史郎さんたちの部隊（第10師団に編入された第16師団草場支隊）であるに違いない。村々の侵略戦争被害の記録を記した嶧県の文史資料が手に入れば、調査もより核心に近づくにちがいない。

任先生は別れ際に、徐州戦に参加した第5師団、第10師団傘下の各聯隊史がほしいという要望を出された。偶然にも事務局メンバーの一人が大阪に転勤することになり、第5師団、第10師団本部所在地があったところの図書館巡りが可能となり、姫路、岡山、広島、福山、広島、浜田の各聯隊史を集めることができた。早速、任先生にお送りしたが、それらの聯隊史に目を通す機会にも恵まれ、徐州戦がより立体的に見えるようになった。かくして「聯隊史」から見えた徐州戦を私なりにまとめ、会員の皆様にご報告することとなった。

2) 徐州戦への道程——上海戦、南京戦

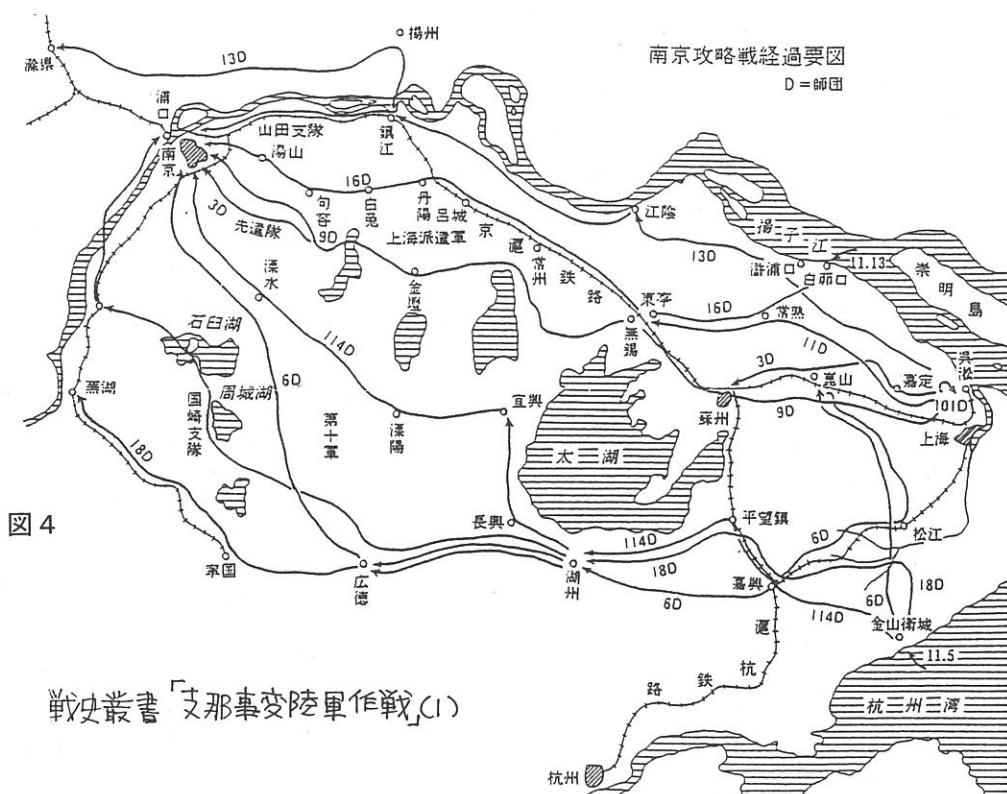
1937年7月7日の盧溝橋事件を契機として、日本の中国侵略は全面化する。そしてほどなく戦火は上海に飛び火することになる。8月15日、時の近衛首相は「暴支膺懲」を宣言。近衛は“一撃のもとで暴れる支那を懲らしめる”と公言したのである。実際のところ、日本政府も軍も中国軍を侮り、1週間もすれば上海を制圧できると踏んでいた。ところが中国軍の抵抗は日本政府・軍の予想をはるかに超えるものだった。皮肉にも「日独伊防共協定」という同盟関係にあったドイツ軍に訓練、整備された蒋介石直系の中国軍が満を持して待ち構えていた。日本軍は制圧するどころか窮地に追い込まれてしまった。急遽、上海派遣軍の戦闘序列の編成が下され、予備役、後備役を中心とした部隊が続々と上海戦につきこまれることになる。

それでもなお中国軍の激しい反撃がつづき日本の政府・軍の一撃論は完全に破綻をきたした。およそ1万人の戦死者をもって、3ヶ月後の11月中旬、上海は制圧された。

日本軍部隊は上海制圧後、雪崩をうって南京に向かった。南京に向かう日本軍兵士たちは、上海における思いもかけない同胞の多大な犠牲からか、復讐心と敵愾心におおいつくされ、まさに鬼の様相を呈していた。中支那方面軍は、陸軍参謀本部により設定された制令線（これ以上進軍するなという制止ライン）を2度にわたりいとも簡単に突破していった。上海派遣軍と第10軍は、食料を略奪しながら、先を競って南京へ向かいはじめていた。軍にとっての脊髄とも言うべき指揮命令系統などあったものではない。そして例のごとく政府・軍中央は現地軍の暴走を追認することになる。

同年11月20日、国会により設置が認められた大本営（戦時統帥機構）は、ついに12月1日、南京占領を認める大陸命を発するにいたる。現地軍に引きずられての大本営の大陸命であったが、しかしその背後には、中国の首都南京を占領すれば、蒋介石も屈服するに違いないという、主観的願望があったはずである。それはまた、中国はまとまりのない国であり、軍事力も日本の比ではない、従って首都南京が陥落すれば、中国は屈服せざるを得ないであろうという思い込みからきたものであった。

南京占領にあたり日本軍は、中国軍民の抗日の意志を根こそぎ挫くべく、暴虐の限りをつくした。



南京は、日本軍が殺戮・略奪・強姦をほしいままとする、まさに「暗黒の世界」となったのである。しかし、中国が屈服することはなかった。

南京陥落の直前、国民政府は首都を武漢に移すことを決定した。外国公館も移動し、武漢は首都として機能し始める。他方、抗日の闘いはさらに拡がりを見せ、燎原の火の勢いとなっていった。挫かれたのは、中国を侮った日本の「一撃論」であり、中国の屈服を期待する「主観的観測」であった。

日本政府と軍が総括すべき時期を迎えていたはずである。広大な中国を占領するなど、どだい無理であることを理解すべきであった。しかし、日本の政府と軍は総括するどころか、近衛首相は1938年1月10日、「帝国政府ハ爾後国民政府ヲ相手トセス…」と政府声明を発し、国民政府との交渉の窓口すら自ら断ち切った。その後、日本はますます深い泥沼に足を踏み入れることになった。徐州戦は、その深い泥沼の最初の1つであった。

3) 政府の不拡大方針と北支那方面軍の徐州戦への衝動

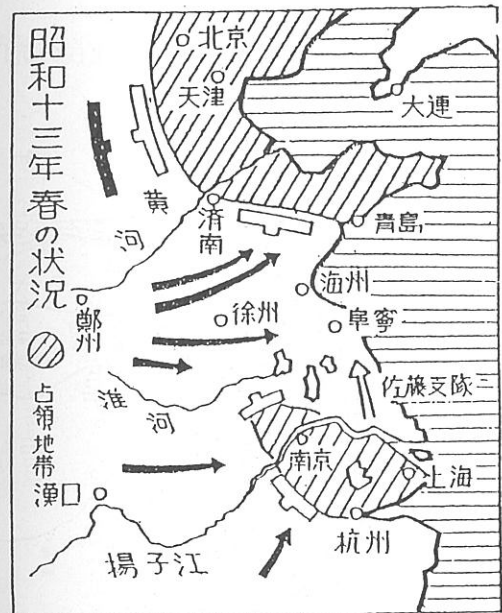
政府・大本営は1938年になると長期持久戦を覚悟せざるを得なくなる。つまり「支那一撃論」が破綻したと言うことである。しかし、現場の兵士たちは、いくら負けても「支那一撃論」から解放されることはなかった。

政府・大本営は対ソ戦に対する準備も怠る事ができない以上、「満州」から関東軍を、華北や華中に大規模に引き抜く事もできず、兵員・兵器不足が決定的であることを認識せざるを得なくなっていた。従ってこれ以上の戦線の拡大はなんとしても避けたいというのが政府・大本営の本音であった。

新設師団の前倒しの編成が急がれ、国家総動員法の制定が急がれてはいたが、それでも政府・大本営は不拡大方針であった。ところが北支那方面

軍は徐州戦に向けた強い意見具申を続けた。対して、陸軍参謀本部参謀次長は、1938年2月4日「…然レトモ当方トシテ考フルコトハ敵ニ誘発誘致セラレ思ハサル戦面ヲ拡大シ兵力ヲ拡大シ兵力ヲ吸収セラルル事、国軍全般ノ整理整頓、即チ次ニ考フ可キ大転換ニ対応スル施策ニ妨害ヲ生スルノ点ニシテ貴電ノ如ク当面ノ敵ニ一痛棒ヲ食ハサントスルモ地勢上ヨリ観テモ要スルニ撃攘スルト云フニ過ギズ、此ノ結果従令山東省境ヲ越エスト云フモ此処ニ抛ルヘキ地障トテ無ク守ル訳ニモ行カ

図5



戦史叢書「支那事变陸軍作戦(2)」より

ス現在ノ態勢ヲ梢々南方ニ移転セシムルト云ウニ過キサレヘシ・・・従ツテ現在ノ占領地域以南ニハ仮令自衛上ノ攻勢動作トハ云ヘ其結果占領地域ヲ拡大シ若クワ車ニタクノ兵力ヲ吸収セラルルカ如キハ既ニ確立シタル中央ノ大方針トシテ絶対ニ御許無キモノト承知セラレ度」と発している。

更に昭和13年(1938年)2月16日、大本営御前会議は昭和13年2月から夏にかけての「支那事変帝国陸軍作戦要綱」の「方針」を「支那ニ於ケル現占領地域(北支那方面津浦線以西ニ在リテハ黄河ノ線迄ヲ含ム)ヲ確保シ其ノ安定ヲ期スルト共ニ対蘇支二国作戦ノ為、軍ノ實質的整備ノ完遂ヲ図リ第三国特ニ蘇国ニ対シ警戒ヲ厳ニス。状況之ヲ許スニ至ル迄右戦面ヲ拡大シ又ハ新方面ニ対シ作戦ヲ行フコトナシ」とし「作戦指導要領」として「三、済南、浦口鉄道〔津浦線〕沿線現在以上ニ作戦面ヲ拡大セス」と指示した。

ところが、大本営御前会議の「作戦要項」決定の翌日の2月17日、北支那方面軍麾下の第二軍参謀長は、「作戦要綱」を無視するかのようになり司令官の意思として隷下の部隊に対して次のように伝えた。

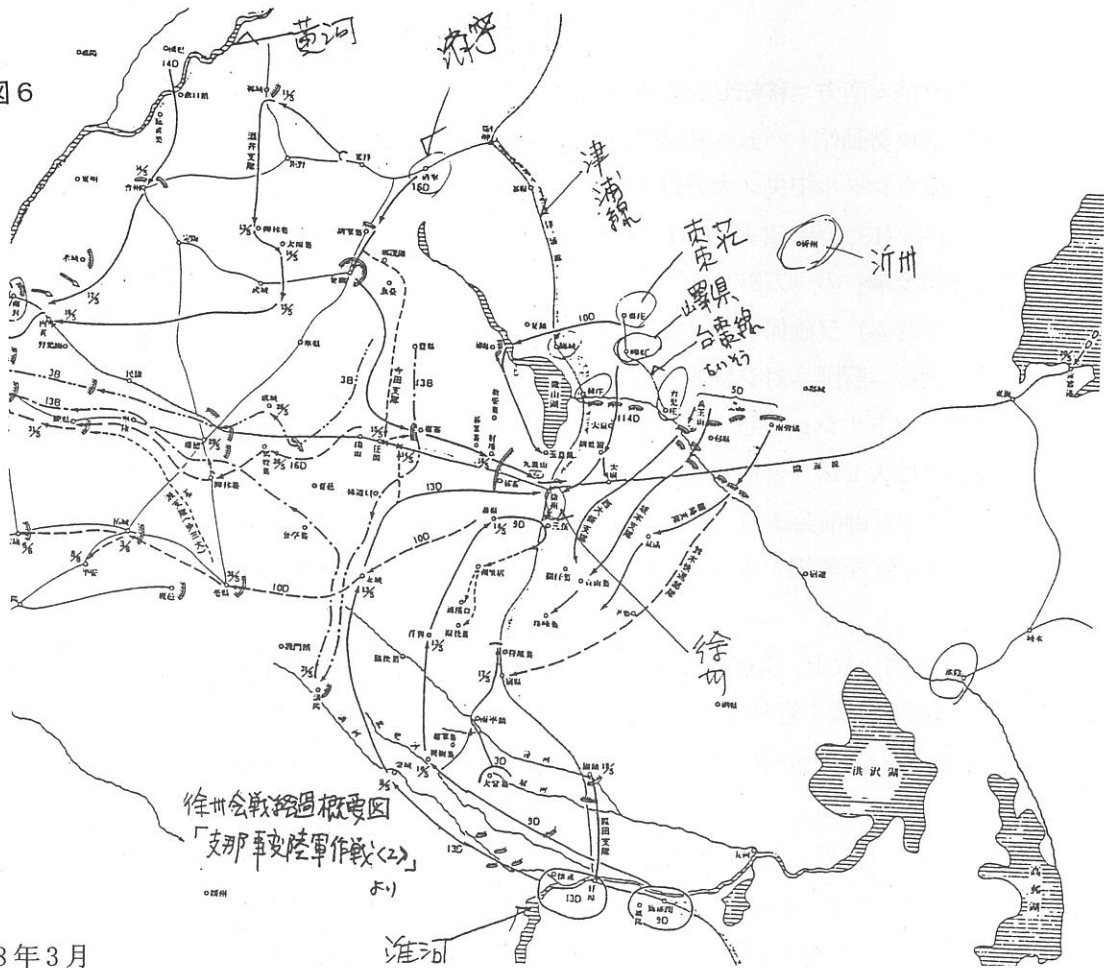
「一、第10師団は汶上、済寧付近の敵を撃攘すること。二、第5師団は一支隊を沂州方面に前進させて第10師団の作戦を容易ならしめること。」

第10師団は当時兗州、済寧、鄒県地区の警備にあたり、第5師団は膠済線沿線の警備の任にあっていた。

第二軍参謀長の「意思」を受けて第5師団長は、2月23日歩兵第21旅団長・坂本少将指揮下の坂本支隊〔歩兵11連隊(広島連隊)、歩兵第21連隊(浜田連隊)を基幹〕を編成し湯頭鎮を占領。第10師団長は、3月8日歩兵第10連隊(岡山連隊)と歩兵第63連隊(松江連隊)を基幹とする瀬谷支隊に南下を命じた。その南下命令とは「一、密電ニ依レハ津浦線沿線方面ニ於ケル数ヶ師団の敵は近く我々ニ向ヒ攻勢ヲ企画シアルモノノ如シ、二、師団ハ津浦方面ノ敵ノ攻勢ニ対シ機ヲ見テ主トシテ瀬谷支隊ヲ以テ之ヲ殲滅セントス、三、瀬谷支隊ハ適時津浦線ノ敵ヲ撃滅シテ先ツ界河付近ニ進出スヘシ」という代物だった。

「第二軍は3月上旬方面軍を通じて大本営に対して『眼前の敵を追い払わしてくれ、決して深く南進する作戦ではない。後方警備のため兵力を増加してほしい』旨を申請した。これに対して大本営内で反対もあったが、結局は第二軍の言を信頼して一部の兵隊を増加し、第二軍の掃討作戦を認可した。この認可は従来慎重であった作戦課長河邊大佐に代わって、陸軍省軍事課高級課員稲田正純中佐が作戦課長へ3月1日に就任した事も有力な一因であった。第二軍は3月13日、第10師団に対し、大運河以北の敵撃滅を、第5師団に対し、一部をもって沂州占領後、嶧県付近に進出して第10師団の作戦に協力すべきことを命じた。「第二軍の企図は、右目的達成後においてはおおむね滕県、沂州の線において爾後の作戦を準備するというものであった。かくして中央の不拡大方針の一角は崩れた。」(「戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈1〉」防衛庁防衛研究所戦史室編纂)

図 6



1938年3月

北支那方面軍 司令官 陸軍大将 寺内寿一

第一軍/第14師団、第20師団、第108師団、第109師団基幹
司令部—石家莊

第二軍/第5師団、第10師団基幹 司令部—濟南

方面軍直轄/第16師団、第114師団、支那駐屯兵団

独立混成第3~5旅団

第5師団 (広島) 師団長 板垣征四郎中将

坂本支隊

歩兵第21旅団長 坂本順少将

歩兵11連隊 (広島連隊) 連隊長 長野祐一郎大佐

歩兵21連隊 (浜田連隊) 連隊長 片野定見大佐

歩兵42連隊の1個大隊、野砲第5連隊、山砲兵1個大隊

第10師団 (姫路) 師団長 磯谷廉介中将

瀬谷支隊

歩兵第33旅団長 瀬谷啓少将 (3月9日に着任したばかり)

歩兵第10連隊（岡山連隊）連隊長 赤柴八重蔵大佐

歩兵第63連隊（松江連隊）連隊長 福栄眞平大佐

独立機関銃第10大隊、独立軽装甲車第10、第12中隊、野砲兵第10連隊（1コ大隊、2コ中隊欠）臨時野歩兵中隊（90野砲）、臨時編成山砲兵中隊、野戦重砲兵第2連隊（1コ大隊、連隊段列半部欠）、支那駐屯砲兵連隊第2連隊第3大隊（15榴2コ中隊）、工兵第10連隊第1中隊、師団通信隊の1部、師団衛生隊、師団第1野戦病院、兵站自動車

第15中隊

このほか野戦重砲兵第1旅団長の指揮機関の一部と師団参謀逆瀬川幸男大尉配属。まさに大規模兵团。

4) 台兒莊戦争 — 第一次徐州戦の開始

かくして、歩兵第11連隊史が称するところの「南部山東省勦討作戦」、中国側のいうところの「台兒莊戦役」が始まることになる。

瀬谷支隊は鄒県を発ち界河付近に集結。「敵は在徐州李宗仁隷下の四川軍」。第10連隊の赤柴連隊長は「敵の素質は侮り難きものあり、而も其数大なるに鑑み連隊は極力兵力の分散を避け飽くまで軍旗を中心として連隊一丸となりて、敵の後方まで楔入するを以て主義とす。・・・敵の謀報網周知なるに鑑み今回は一切戦場に於ける支那人の交通は我が間諜を除くほか之を禁じ若し之を犯すものは老若男女に論なく全部射殺すべし。我が密偵には白布を携行せしめ我軍の前方に来らば、之を体の前面に垂れ識別を明らかにし以て之が誤殺を避くるものとす。」という指示を全将校に出す。まさに村々は中国の人々が想像だにできなかった殺戮の戦場と化すことになった。

瀬谷支隊は界河を占領後、滕県城の攻撃に移る。激しい抵抗の前に占領に2日を要す。赤柴連隊長も負傷。日本軍側の戦死者16名、負傷者129名。中国軍第44軍（四川省）122師長王銘章も戦死。歩兵63連隊（松江連隊）は3月17日臨城占領の後、韓荘・嶧県に進む。その間瀬谷支隊は主力を臨城に結集させる。そこで沂州に向けた戦闘で苦戦中の坂本支隊に対する支援部隊—沂州支隊の編成・派遣が師団命令として下達された。

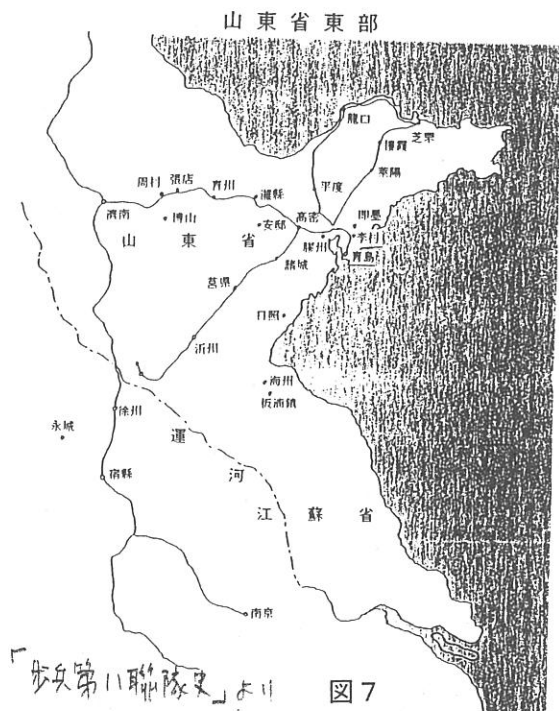
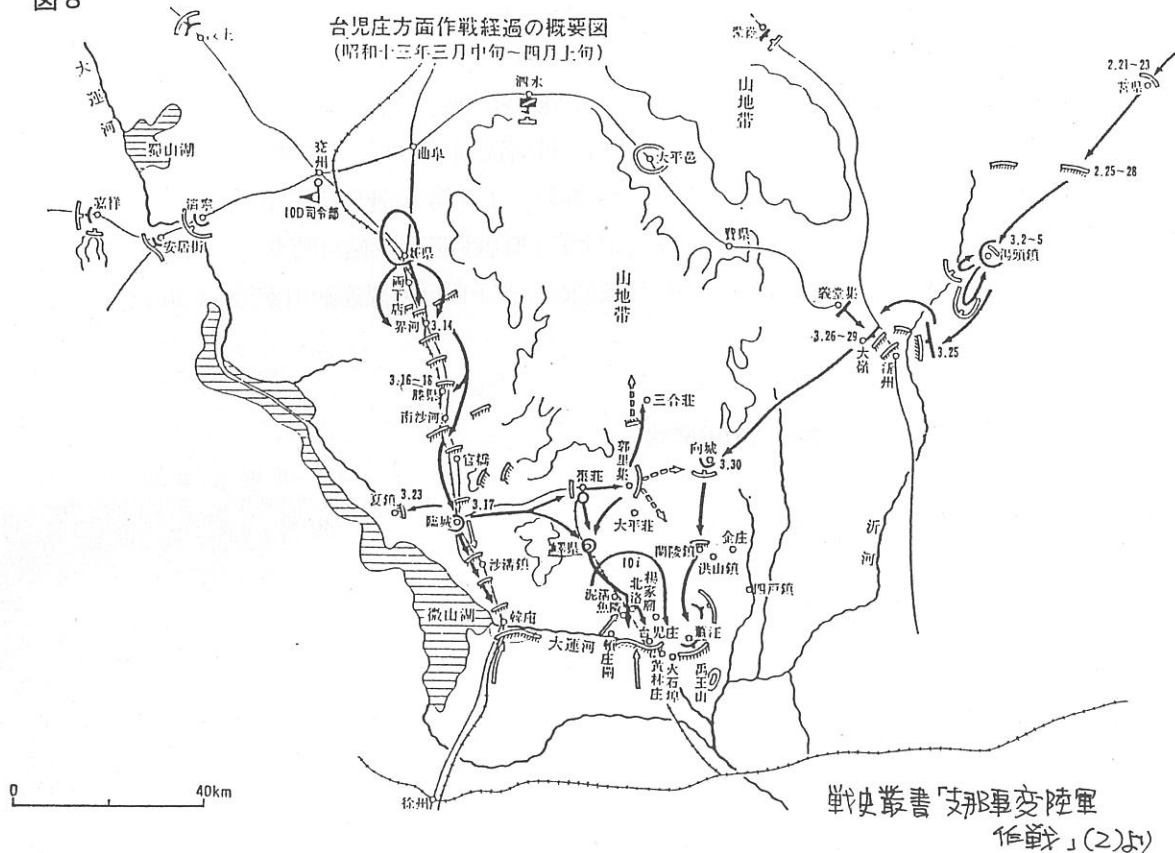


図 8



これより先の第5師団の先遣隊一片野支隊は莒県を経て2月25日、陽頭鎮近辺に達していた、片野支隊は苦しい戦闘が続き湯頭鎮の攻略は3月5日まで達した。渡された地図が全く現実と異なるというのだ。更にその後の西水湖崖での戦闘でも大きな打撃をこうむる。これらの戦闘を「歩兵21連隊史」は次のように総括している。「忻口鎮(山西省平型関)の時も敵を甘く見て追撃の一貫の思想で敵の堅固な縦深陣地に対し第一線に準備の日時を与えず攻撃を命じ、約一ヶ月の苦闘を惹起した。今度の場合もまた敵の強い反撃企画を軽視して兵力を逐次使用し決戦兵力の集結が遅れ、しかも第一線部隊の実情把握の努力を怠り、現実を知るやあわてふためき作戦指導の一貫性を欠いてしまった」。この部隊は明らかに「平型関」の深いトラウマにさいなまれていた。なお片野支隊は2月23日坂本支隊指揮下に入っていた。

坂本支隊の苦戦は更に続く。その基幹の歩兵第11連隊の第3中隊は官庄をめぐる戦闘で、3月16日40名の戦死者と多数の負傷者を出し、ほぼ壊滅してしまつた。他方、沂河西岸を進む第三大隊はその翌日の3月17日茶業山付近で敵の包圍攻撃を受け、損害が続出し戦死者の収容もできないほど追い詰められた。このところについて「連隊史」は「部隊の建制は混乱し付近に所在する兵力を寄

せ集めて臨時の編成部隊を作って応戦することもしばしばであった。しかも坂本支隊の命令すら死守・撤退が再三変転する有様であった。坂本支隊は戦線を縮小して次期作戦に備えることとし陽頭鎮付近に集結を図った」と記述する。

苦戦に苦戦を重ねる坂本支隊を援助するため、瀬谷支隊に急拠編成された沂州支隊が郭里集を経て紀官庄に行ったところで夜襲をかけた小隊が逆に包囲され、部隊40名のほぼ全員が戦死を遂げた。さらにその後郭里集全体が中国軍の包囲を受け沂州支隊そのものが窮地に陥ってしまった。3月29日は総力をかたむけ、その包囲を打ち破ったが3月24日から29日にいたる第10連隊の戦死者は61名、負傷者は54名を数えた。瀬谷支隊は沂州支隊の派遣を中止し、3月29日中国軍が陸続と結集しつつある台兒荘に向けた進軍を開始した。しかし既に3月24日瀬谷支隊第63連隊第二大隊が台兒荘の東北部の一角に取付いていた。

坂本支隊は沂州を前にどのような状況におかれていたのか。坂本支隊は沂州北方で沂河を渡り義堂集の敵を攻撃する指示を受けるが、ここでも大変な苦戦を強いられる。その様子についても「連隊史」は記す。「3月28日、連隊は大嶺に続いて小嶺の攻撃に立ち向かったが鎧袖一触と思われた敵陣は我が予想を遙かに越える頑強な抵抗を示した。第一大隊は午前4時敵前300米に進出、午前7時野砲突撃支援射撃のあと突撃を開始し二条の突破口から突進して小嶺部落の一角に突入したが、敵は手榴弾を以て必死の抵抗を行い午後に至っても攻撃は進展しなかった。この戦闘で第3中隊長長尾昇大尉は負傷し小隊長もすべて戦死傷したので奥村曹長が中隊の指揮を執ることとなり、以後軍旗中隊として終始した。」曹長が中隊の指揮を執らざるをえないところに坂本支隊の損害の凄まじさが示されている。

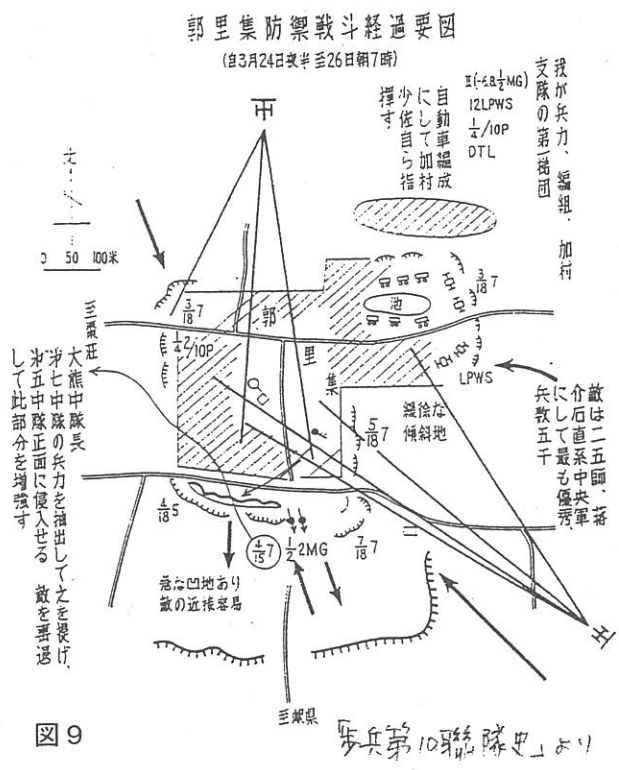


図 9

またある兵士が「連隊史」のなかでこの小嶺での戦闘の一コマを次のような手記で残している。「私は小嶺の部落の外れの麦畑の中に伏せて次の命令を待っていた。・・・この麦畑の中に紅に染まり息絶えた若い母親の乳房にすがり泣いている幼子、また傷を受けた子を抱えて、纏足のビッコの足をピョコピョコ飛び回るようにして気が狂ったのかと思われる母親、親にはぐれた子、子を失った親、家は焼かれ帰るべき所も食べるものも失った難民の群。この戦場の悲惨な姿は負傷した中隊

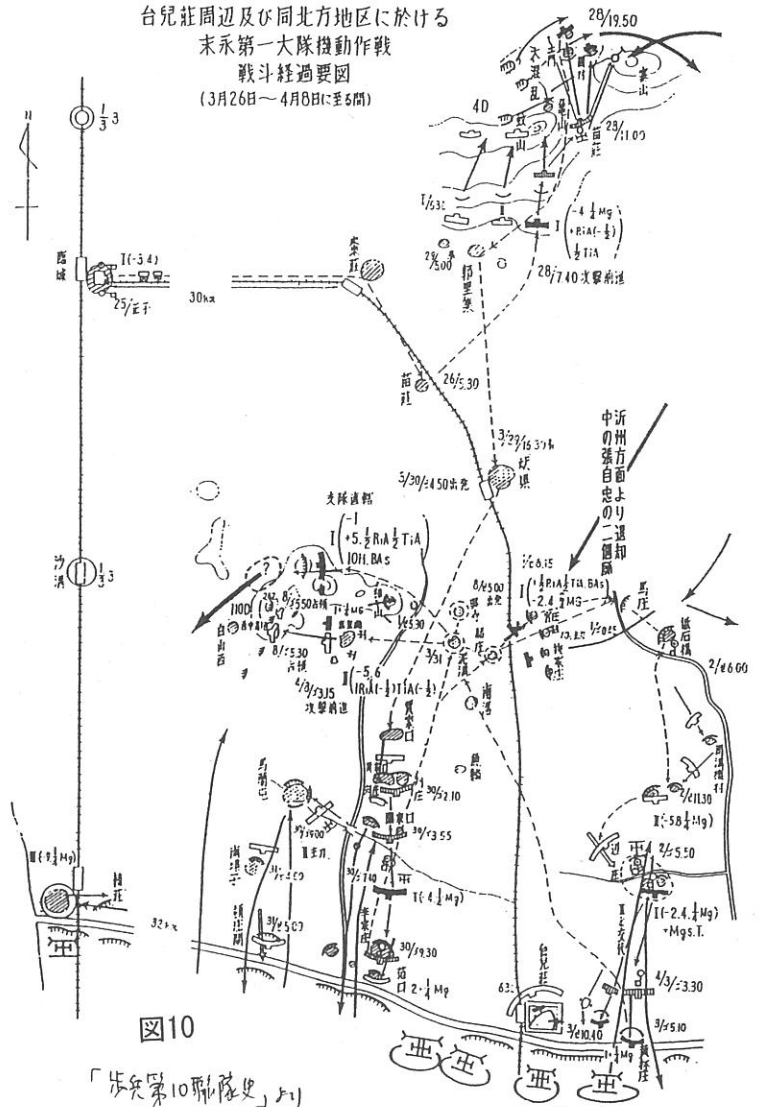
長柳川中尉のいうように『戦争とはむごいものよのう』という言葉がピッタリあてはまる」。このような悲惨な戦争を作り出しているのが、日本軍そのものであることは言うまでもないが、この惨憺たる光景を、この兵士は決して忘れる事はできないだろう。がしかし、この光景を子や孫に伝えたのか、できることなら、問うてみたい衝動にかられる。

3月29日になると坂本支隊は台兒庄へへの転進命令を受ける。その転進について「連隊史」は次のように記録している。「3月29日。・・・このころ済南から南下した第10師団の主力は台兒庄の敵の堅陣に突入を計ったが、逆に敵に包圍されて危殆に瀕した。又その一部は坂本支隊と呼応して沂州攻略に参加する計画であったが、郭里集付近で敵の大軍に妨げられて挫折した。このため第10軍の苦境を救うべく午後2時坂本支隊は台兒庄付近に進出すべき命令を受け、支隊長は片野部隊（歩兵21連隊）を右縦隊として向城から蘭陵鎮経由、長野部隊（歩兵11連隊）を左縦隊として洪山鎮経由、それぞれ台兒庄目指して前進すべき事を命令した。連隊は深夜行動を開始した」。

瀬谷支隊第63連隊の台兒庄攻略部隊の戦闘も殆ど進捗しなかった。それどころか至るところで激しい戦闘が繰り広げられることになった。

第10連隊の4月2日の辺庄（台兒庄東北2軒）についての「第10連隊戦闘詳報」に激戦の実態がよく表現されている。「敵ハ第27師第？旅ニシテ昨日来ノ戦闘振リヲ検討スルニ流石蒋介石ノ信任厚カリシタケニ決死勇戦ノ状態タリ散兵壕ニ倚ツテ守兵悉ク最後迄頑強ニ抵抗ス、宜サル哉此敵79壕ヲ狭シト折リ重ナリ枕ヲ並ヘテ討死セル様、敵ナカラ天晴レト見ル者ヲシテ屍山血河ハ独リ日本軍特有ノモノニ非ス、他ヲ識ラスシテ徒ラニ自己陶醉ニ晏如タルハ国軍ノ為モ戒慎ヲ要スヘシ、此日2日ニ於ケル我損害死傷将校以下66名ニシテ敵ノ遺棄死体ハ？百五十ヲ下ラス。」

坂本支隊は蘭陵鎮を経て台兒庄近郊に向う。第21連隊は火石埠を攻撃し台兒庄東方の肅汪への進



軍を命じられる。「北支長城線、太原城攻略戦を終え保定に集結して再編成して徐州攻略戦に参加し、昭和13年3月1日より泉沂庄、大太平、郭太平、書庄と相次ぐ激戦に中隊長剣持大尉戦死、ほか将校以下多数の死傷者を出し、今は中隊長員僅か40数名を数えるのみとなっている。しかし一同の士気は極めて旺盛である。その編成は次の通りである。中隊長新田准尉、小隊長大屋伍長、第一分隊藤川上等兵、第2分隊長三浦上等兵。中隊長は静かに命令を下した。曰く、大隊は黎明を期して火石埠を攻撃する」(第10連隊第10中隊第1分隊長藤川実上等兵の手記)。火石埠にいたった戦況を第21連隊の広瀬栄氏の手記は次のように記す。「火石埠は台兒庄東南東わずか5キロ、あと一步進撃すれば台兒庄東方にあった福栄部隊(第10師団、松江編成、第21連隊)と連絡できる距離であったが、大河の如く戦場を埋め尽くす敵大軍の波に押し寄せられて、これに抗し難く、結局本隊の位置に後退せざるを得なかった」。

台兒庄を攻略しようとする瀬谷支隊も坂本支隊も間違いなく窮地に追い込まれていた。どちらの兵団の指揮者も一刻も早くこの窮地から脱したいと考えていたとしても何ら不思議はない。

4月4日板垣征四郎第4師団長から「支隊は速やかに当面の敵を撃滅したのち、沂州攻略のため転進すべき」旨の命令を受け、坂本支隊長は5日瀬谷支隊長に対して「支隊ハ沂州攻略ノ為反転ヲ命セラレ明日日没行動ヲ開始シ」と七日払暁迄は転進するなどの師団長命令にも拘らず撤退命令を下す。しかも台兒庄城門にへばりついていた部隊が撤退する際、大量の食料と兵器を残したままである。客観的にはまさに日本軍の敗退であった。国民政府は大規模な戦勝キャンペーンをおこなった。

戦後になっても、坂本支隊はなぜ台兒庄から「転進」し、更に瀬谷支隊も続いたのか様々な憶測が飛び交った。本音のところでは瀬谷支隊は坂本支隊が日和ったと信じ、坂本支隊は瀬谷支隊が無謀な戦争を仕掛けた結果だと信じているようである。ちなみに「第21連隊史」は「第5師団長は連絡不良のため坂本支隊の戦況は有利に進捗しているものと誤って判断し沂州攻撃を命じた。坂本支隊長は混戦のためこれもまた瀬谷支隊が台兒庄を攻略したものと誤って判断し沂州に向う反転を4月5日通報した」と記す。又「第11連隊史」は「瀬谷支隊が残敵掃蕩ないし警戒陣地占領のつもりで山東省内のしかも大運河以東の台兒庄を目指したのはもちろん命令違反ではなかったが、結果的には過少の兵力で敵の大軍の中に飛び込んだこととなり事態は思いもかけぬ方向に発展した」と述べている。

5) 徐州戦のはじまり

「大本営は戦面不拡大方針で第二軍の作戦も敵の反攻撃破という限定作戦として認可したものであった。大本営は台兒庄方面に多大な中国軍、特に湯恩白軍が出現したのを見て、蒋介石軍主力に一大打撃を与え、敵の抗戦意志を挫折させる好機なりと考え徐州作戦を実施することに決した」。4月7日のことであった。(戦史叢書「支那陸軍作戦(2)」)

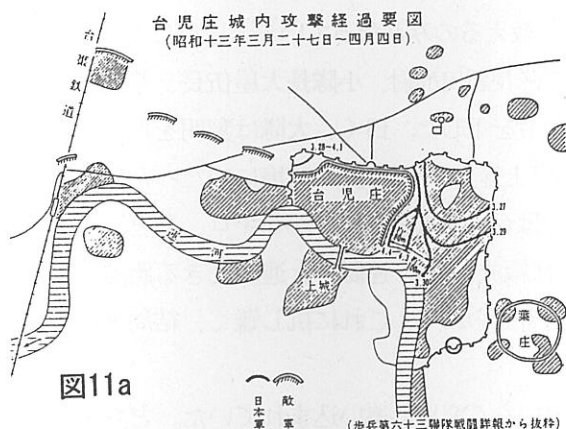


図11a

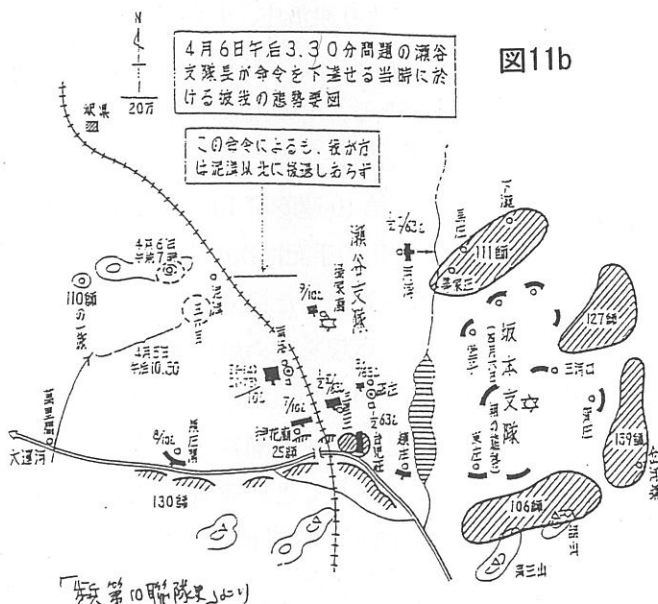


図11b

「第11連隊史」はそのところを次のように記す。「南京陥落後の13年3月、中支那派遣軍は津浦線の徐州と揚子江岸の間まで一部兵力を進出させており、北支那方面軍では第二軍隷下の第10師団の一部が大運河の線に進み、第5師団がこれに協力して莒県を占領していたが、たまたま第10師団の一部が台兒庄で敵の大軍と衝突して苦戦し、敵は約50個師団の大兵力が結集していることが分かった。事変解決に苦慮している折から、この大軍を捕捉して大打撃を与え、更に漢口を攻略して蒋政権を奥地に追いやってしまえば事変終結の糸口になるはずであるという意見が台頭した」。

徐州戦は日本軍あげての大きな戦争となった。北支那方面軍からは主に第114師団と第16師団が第二軍に配属されることになり、徐州戦に加わる。中支那派遣軍からは主に第9、第13師団が南京方面から徐州に向けて進軍する事になった。

坂本支隊はなんとか包囲網を突破し棗荘に向け撤退を開始。瀨谷支隊の主力は嶧県南方の獐山、白山西方面に撤退してゆく。白山西の高地は激しい戦闘の末、第10連隊が占拠。「連隊は翌8日午前5時高皇廟に向け前進し同7時30分東部高皇廟に到達、支隊から『台兒庄の敵北上の顧慮から白山西の敵の攻撃はなるべく迅速なること緊要なり』と電命され、また尖兵中隊の第一中隊が得た捕虜の言により、敵は第110師330旅660団に属し、一旅は西方高地にあり、他の一旅は河崖（地点不明）にありとのことであった。第110師は湯恩伯軍の王仲廉軍長の麾下である。・・・攻撃前進に移るや前方寺院高地の敵が頑強であった。岩窟内の自動火器が最も猛威を揮い、チェコや迫撃砲が火力を集中して高地脚に到達する前に損害が続出した。この間迫撃砲団は連隊長の身辺にも落下炸裂し本部伝令に死傷者を出し、軍旗の側方20米に土煙が上る始末であった。午後4時45分左記支隊命令の要旨電報を受領した。『・・四、第一大隊ハ白山以西、以北及び高地ヲ堅固ニ占領スヘシ』。

圖12

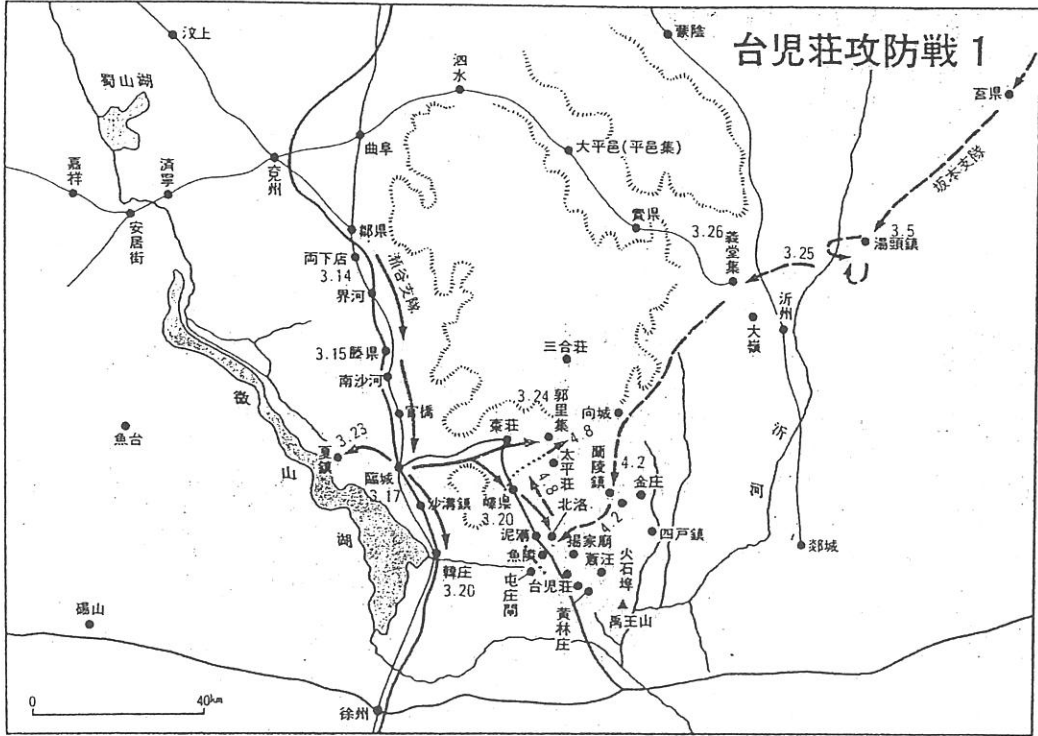
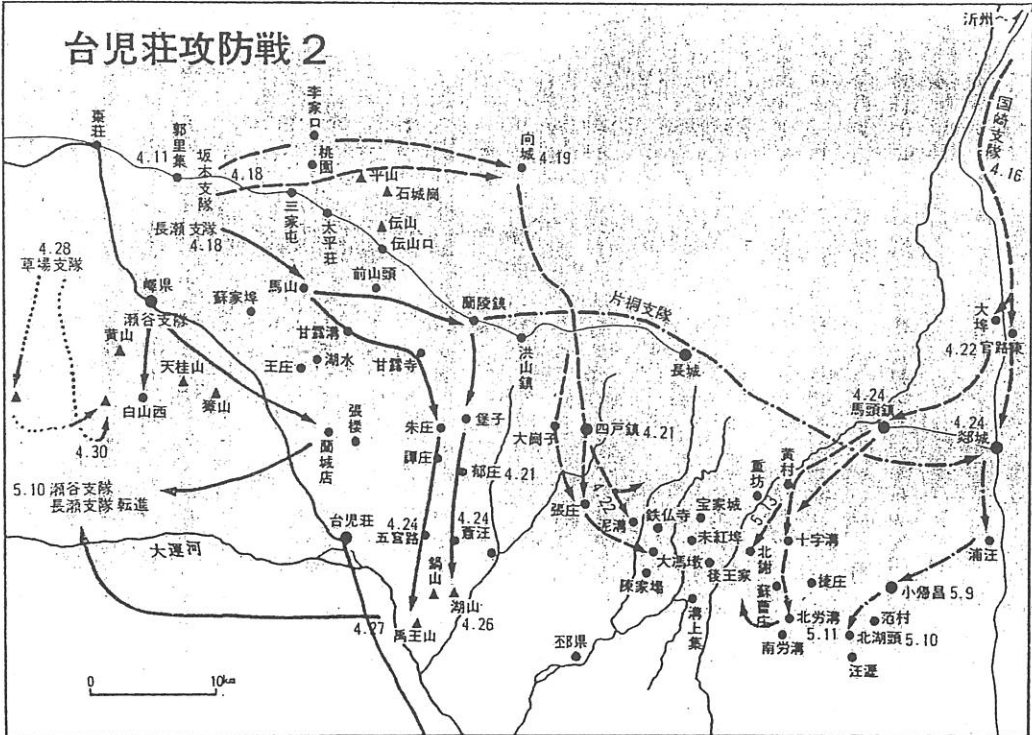


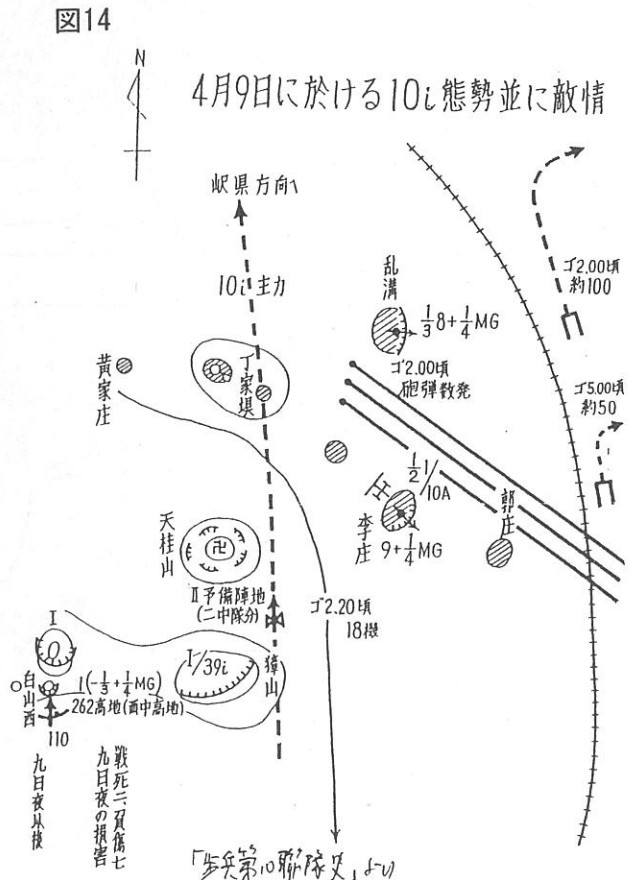
圖13



これによって攻撃中の敵を昼間の内の決着をつける必要が生じた。谷口野砲第10連隊長は終始赤紫連隊長と共に敵弾下よく機宜に適した射撃指揮をとった。この砲兵の集中射撃に援けられて午後5時30分左第一線の第8中隊が突撃し、続いて同50分右第一線の第1中隊も突撃して山頂を占領した。この突撃の際の手榴弾戦で吉元第8中隊長代理は負傷した。この日晴天なれども強風吹き荒れ戦場は黄塵万丈にして凄愴。敵は高地西南金陵寺方向へ退却を始め、我が第一線の重火器は一斉にこれを猛射、忽ちにして敵は潰乱に瀕した。敵の遺棄屍体は第11師328旅656団第2營長以下少なくとも四百を下らず、我が損害は戦死3名負傷者7名であった。連隊は支隊命令に基き、高地の重要性に鑑み、第1中隊（機関銃一小隊附す）を残置し末永部隊と連絡せしめ主力は支隊長の意図の如く午後11時過ぎ、丁家埧付近に集結を完了した」（「歩兵第10聯隊史」）この第1中隊が付近の掃討戦を実施し、強姦と殺戮の実践者となったであろうことが予想できる。更に白山西についての記述を「第10連隊史」から拾う。

「防御陣地として選ばれた白山西一帯の高地線は岩山で、樹木がなく、従って陣地構築は最も困難であった。壕を掘ろうにも土はなく岩や石を積上げて掩体をつくるという状態で、陣地らしい陣地は作れなかった。而も台兒莊北方平地上に孤立した高地線で遮断物も皆無、敵砲兵の好餌となり易い地形であった。加えて高地上の第一線陣地、特に262高地と後方との連絡は極めて峻嶮なる後方斜面を利用する他なく敵火力の妨害を受け行動困難であると共に弾薬、資材、糧秣の運搬も至難であった。こうした悪条件にもかかわらず、この地を選んだのは末永第一大隊長が『262高地は日露戦争に於ける旅順要塞の203高地に匹敵すべき重要陣地にして、この高地を制するものが台兒莊平野を制することができる、彼我両軍とも最も重要視しある陣地であった』と極言している通りであったからである。……本防御戦闘は、極めて優勢（特に砲兵力）なる敵の反復限りなき攻撃と、連日

連夜に亘る砲撃に対し、最も不利なる防御陣地に在って、弾薬不足にもかかわらず、また幾多続出する損害をも顧みず旬余の長きにわたって之を死守した戦闘振りは、稀有の戦例として光彩を放った。特に第一中隊（隊長・西中晃中尉）は、幹部は中隊長と長光茂伍長ら下士官六名のみとなり、



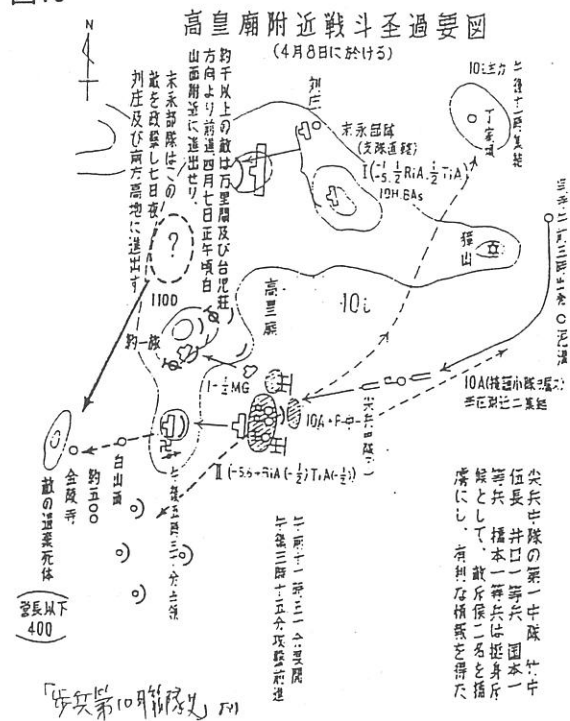
他の幹部は全員死傷する損害を受けた。赤柴連隊長はこの262高地を4月11日より西中高地と命名した。なお、弾薬不足の中、これが補給のため第一中隊兵器係の新田満義軍曹は重症の身で弾薬補給に挺身し、その勇敢なる行動は一際将兵の胸を打った。第一大隊の参加人員789名、戦死27名、負傷94名。敵に与える損害は判明せる遺棄屍体のみで1060名を数えた」。

白山西以東の守備隊も甚大な被害を負った。白山西の東側に位置する李庄部落の守備隊—第二大隊は戦死24名、負傷108名を数えた。台兒荘を撤退しても、なお瀨谷支隊は大規模な敵に包囲され苦戦が続いた。

北支那方面軍は第4師団主力を第2軍に配属、第2軍は増加兵力をもって第5、第10師団の第一線兵力を増加せしめた。第二軍は 4月8日第10師団の指揮下に入った坂本支隊は郭里集周辺での戦闘の後、向城に向う。四戸鎮に進軍を開始したのは4月20日のことであった。それより先の4月15日、第10師団は師団命令を下す。「師団ハ18日払曉現在線カラ発進シ重点ヲ棗荘—伝山口—蘭陵鎮道方面ニ保持シテ当面ノ敵ヲ攻撃シ、一挙ニ台兒荘、禹王山（台兒荘北東22軒）、岔河鎮（台兒庄東方12軒）四戸鎮（台兒庄北東22軒）ノ線に進出シテ、南部山東省ノ敵ヲ掃滅スル。二、師団ハ北カラ坂本支隊（歩11、歩21各主力基幹）長瀨支隊（歩39、歩40主力基幹）、瀨谷支隊（歩10、歩63主力基幹）ト並列シテ攻撃前進、重点ヲ長瀨支隊正面トスル。瀨谷支隊ハ当初現態勢ヲモッテ敵ヲ牽制スルト共ニ、長瀨支隊ノ攻撃前進ニ呼応シテ攻勢ニ転ズル」。

4月23日には北支那方面軍は徐州作戦に関する下記の命令を下す。「二、方面軍ハ敵ノ態勢完キニ先タチ速ニ徐州方面ノ敵ヲ撃破シテ概ネ蘭封以東隴海線以北ヲ占拠セントス。中支那派遣軍ハ方面軍ト相呼応シ約2師団ヲ以テ蚌埠、懷遠付近ヨリ行動ヲ起シ概ネ津浦線西方地区ヲ北上シ歸徳以東隴海線南方地区ニ於テ徐州付近敵主力ノ退路ヲ遮断シ一部兵力ヲ4月24日東臺（江蘇省）ヨリ北上セシメ方面軍ノ作戦ニ協カス。三、第二軍ハ其兵力ノ結集ニ伴ヒ成可ク速ニ攻勢行動ヲ開始シ当面ノ敵ニ対シ徐州西方地区ニ主決戦ヲ求ムル如ク攻撃シ且徐州ヲ占領スヘシ」

図15



第五、第十師団の南部山東掃蕩作戦（昭和十三年四月中旬～五月中旬）

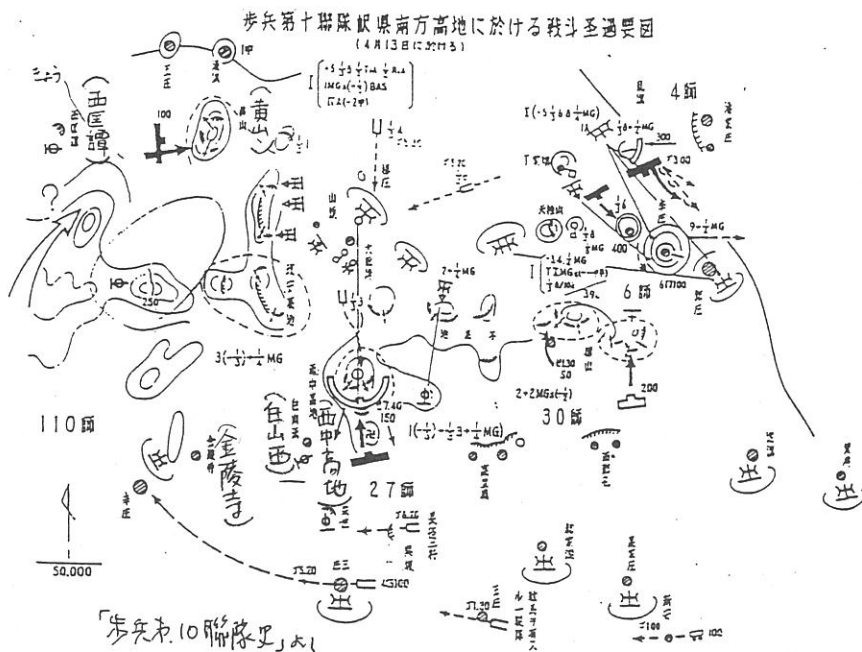


図16

6) 戦死傷者続出する戦闘、そして第16師団第20聯隊の敗北

坂本支隊は四戸鎮を経て泥溝地区に進出するが、激しい敵の攻撃にさらされ死傷者続出。連防山付近の戦闘の際には、第21連隊の第2中隊は「僅か17名となった」（第21連隊史）「坂本支隊は5月6日第10師団の指揮下に復帰するが、敵の反撃は活発で5月14日までに連日苦闘を続け、坂本支隊の損害は甚大であった。（戦史叢書「支那事変陸軍作戦〈2〉）」また坂本支隊にかわって沂州を攻略した国崎支隊（歩兵第41連隊〈福山〉、歩兵第42連隊〈山口〉）も中国軍の激しい抵抗の前に激しく消耗する。「国崎支隊は4月28日から北勞溝付近の敵陣地の攻撃を開始したが、頑強な抵抗と有力な反撃を受け、死傷者も多く反撃は進展しなかった。29日からは国崎支隊は東方及び北方からも反撃を受けて苦戦に陥った。支隊の後方連絡線は遮断されて弾薬、糧秣は欠乏し、しかも補給の見込みもたない状況で、死傷続出して戦力は極度に低下した。国崎支隊の歩兵41,42連隊は沂州攻略以来兵員の補充がなく損害の累計は各中隊60%から75%に達し、連隊の実力は一コ大隊以下となっていた」（戦史叢書「支那事変陸軍作戦〈2〉）」。

図17



第5師団は補充兵を送り、更に蘭陵鎮付近の片桐支隊を急抛東進させ国崎支隊を側面から支えた。まさに第5師団あげての支援で国崎支隊は殲滅をまぬがれ、大運河を渡り徐州に向った。

瀬谷支隊はなおも嶧県近郊で苦戦を強いられる。「歩兵10連隊史」がいみじくも語るように「我が連隊は台兒庄付近の戦闘より、その後の嶧県南方地区の防衛や嶧県東南方地区の攻撃で払った犠牲の方が多かった」。瀬谷支隊は5月17日微山湖を渡り徐州に向った。

第10師団長命令で台兒庄に向けた戦線の正面を担った長瀬支隊はどのような状況下であったのだろうか。「戦史叢書」によれば「長瀬支隊は敵を撃破して4月20日夜、蘭陵鎮及びその南西地区に進出し、敵の退却に伴い追撃南下して22日夜、蘭陵鎮南方10軒の地区に進出した。支隊は遂次強化する敵の抵抗と反撃を撃破し、24日蕭汪付近に進出し26日胡山(台兒庄東南東9軒)を27日禹王山(台兒庄南東8軒)を占領した。しかし、胡山、禹王山方面及び支隊の側背に対する敵の反撃行動は活発で5月12日まで連日激戦が続き支隊の損害も26日までに死傷約1500名となった」とされ、「歩兵39連隊史」は4月10日「棗荘を出発して以来本日までの20日間の損害累計は次の通り。戦死者第11中隊長岡本準之助大尉以下226名、負傷者780名」と記している。

どの部隊も甚大な被害を出している。知れば知るほど驚くばかりである。

昭和13年6月、北支那方面軍参謀部第三課が作成した資料によれば第5師団(2月20日から5月10日)及び第10師団(3月14日から5月12日)の死傷者は次の通りである。

第5師団	戦死	1281名	戦傷	5478名	計	6759名
第10師団	戦死	1088名	戦傷	4137名	計	5225名

また第5師団隷下の歩兵第11連隊の連隊史は「5月31日大隊長会同が行われ連隊長から連隊は徐州から宿県の間を集結すべきこと達せられると共に動員以来の連隊の戦死傷者は左記の通りである旨発表された。戦死者 将校74名 準士官以下、1062名 計1108名 戦傷者 将校74名 準士官以下 2254名 計2328名 総計3436名。出征以来の残存者は将校19名、準士官以下819名となった。

図18

計	連隊														合計		戦死 戦傷	
	第1大隊	第2大隊	第3大隊	第4大隊	第5大隊	第6大隊	第7大隊	第8大隊	第9大隊	第10大隊	第11大隊	第12大隊	第13大隊	第14大隊	戦死	戦傷		
14																		
15																		
211																		
271																		
42																		
114																		
114																		
112																		
22																		
21																		

図19

計	連隊														合計		戦死 戦傷	
	第1大隊	第2大隊	第3大隊	第4大隊	第5大隊	第6大隊	第7大隊	第8大隊	第9大隊	第10大隊	第11大隊	第12大隊	第13大隊	第14大隊	戦死	戦傷		
1																		
19																		
142																		
715																		
126																		
37																		
237																		
71																		

234名

764名

「東史郎日記」によれば、東さん（第16師団、第20聯隊、第一大隊、第三中隊、第三小隊）は、4月25日、津浦線の臨城に到着。棗荘に行軍。

年若い支那人が1人いた。使役に使おうと思ったが、何を聞いてもプトンデー・プトンデーと返答して腹立たしい。首をはねてやろうかと思う。手足をひっくくって小屋の中へ放り込む。明朝出発する時は地獄へ送ってやるんだ。

4月26日、東さんは棗荘に到着。「(4月27日) 台児荘で第10師団・第5師団は非常な苦戦をしていたと伝えられる。退却したり前進したり。私たちはまだ一度も退却した記憶はない。退却などは支那軍の専売であるかのように考えていた。日本軍の一部にしろ、退却したなどは全く嘘のようにしか思えなかった。噂によると、敵は第10、第5師団を敗残兵扱いにしているという。日本軍が支那兵から敗残兵扱いにされているとは、いったいどうしたことなのだ。全くやりきれない憤りを感じる。」4月29日、「午前4時出発」。4月30日、馬山の敵と戦闘。西村上等兵の負傷と死。東さんは初めて本当の苦戦につぐ苦戦を味わった。

「今は身を遮蔽するところもなくなった突撃兵隊は、二十メートル先の敵陣へ一挙に突撃を試みた。だが残念なことに、敵陣のまえには幅狭いながらも水をたたえた堀があって、彼等の勇敢なる突撃を拒んだ。堀の手前で切齒扼腕して右往左往するうちに二人、三人、四人、五人・・・と無念の憤死をとげて、ほとんど全員が地獄へ送られた。石橋中隊長もまた悲運の死をとげた。

かくて、この第一回の突撃は完全な失敗に終り、第二回目に第三小隊が突撃した。友軍の砲兵が援護射撃を行ったが、第二回突撃も全滅の悲運のうちに失敗した。もはや昼間突撃の不可を知って、夜間の奇襲を以ってする事になった。生き残っている突撃兵たちは、夜になってから闇にまぎれて、戦友の死体をついで帰ってきた。第二小隊が闇に紛れて、中隊長以下戦死者数十名の死体を収容したが、五、六名の死体は、砲弾と共に散ったのか、敵に奪われたのか見あたらなかった。

かくて、第五中隊は僅か一個小隊編成しか出来ないまでに減少した。ただ一回の突撃に、かくも多大の損害を蒙ったことは、しかもそれが成功せずに終わった事は、未だ我々の記憶にはない悲惨な事であった。我が大野部隊は、こうした犠牲を払っても、無理矢理に前進を続けてきたのである。」

東さんは5月3日の夜、辛庄村へ入る。樋口光夫の死（5月4日）。防禦に移ってから一週間ほど経ったある日の午後、一聯隊は明朝早く現在地を去って他に転戦する— という命令が下った。

もはやこの陣地は捨てて再度敵の手中に置き、我々はどこかに行くのだ。今日まで苦心を重ねて多大の犠牲を払い進んだこの地を、再度敵の手中に渡すのは何としても残念であり、何のための今日までの犠牲なのかと疑問せざるを得なかった。結局我々は退散するのか？と憤慨するのだった。聯隊本部の通信兵の話によると、この転進の決定があるまでには非常な難論があったのだという。彼は通信兵であるので、電話機を介して話される聯隊本部と大隊長の話聞いていたのだ。

最初、聯隊副官の少佐が、聯隊長命令「転進」を各大隊長に電話

で通じたのだが、各大隊長は頑としてそれに応じなかった。“今日までに犠牲になった親愛なる部下に対してすまない。彼等の死は犬死になる”と言って。

そこで今度は聯隊長が電話口に出た。それでも大隊長は言を左右にして、あくまで前進を主張した。聯隊長は、欧州大戦のドイツ軍の例を引き“これは退却ではない。転進だ”と言い、それでも聞かぬ大隊長どもに業を煮やし、遂に、“俺は部隊長である。命令権を天皇陛下よりゆだねられている。その俺の命令がきかれなければ、俺は職を辞するより仕方ない”と命令権発動問題まで出て、ようやく転進が決定したのであった。この争いは午前八時から午後四時までかかったということであった。私たち一兵でも、退却としか考えられないこの転進に不満があった。私は転進にあたって、樋口光夫の墓標を引き抜いて焼いた。なぜなら、我々が転進すると共に敵が来て墓標を踏みじめるかも知れないから。

翌朝午前三時、無人のこの部落に毒ガスをまき、井戸にもガスを落して、隠密に行動を起こした。第三大隊を馬山付近に警戒に残して、その日、我々は嶧县城へ到着した。城外に日本の飛行機が一台墜落していた。敵に落されたものなのであろう。

「私たちは汽車に乗った。汽車は私たちが乗ってきた線路を逆に戻る。」草場支隊が第10師団の配置を解かれ、第16師団の指揮下に復帰した5月9日のことと思われる。

「(5月10日) この一群の唄う列車は大地を蹴立てて済寧に到着した。」

第16師団は済寧から金郷へ。そこから第19旅団は魚台の先方から隴海線沿線の碭山方面へ。

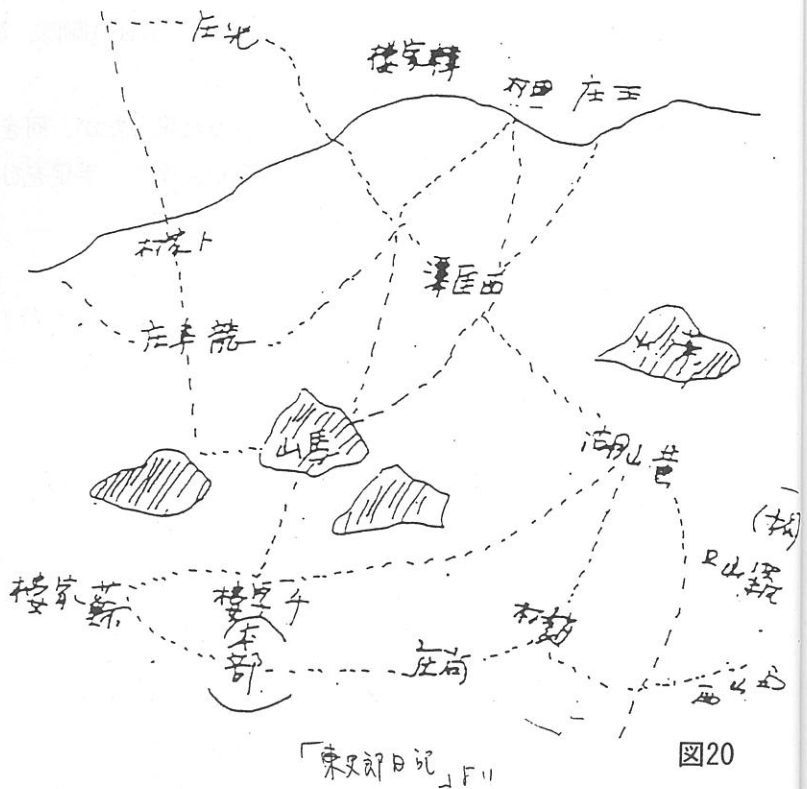


図20

東さんは、碭山の二里手前というその村で、全くおぞましい強姦の場面に出会う。

私たちはあわただしく飯を炊き、次の出発に備えた。夜がすっかり明けて、私は井戸へ水を汲みに行った。水筒に水を汲んで帰ろうとすると、近くの家からにやにやたまらないような笑いをこめて二、三の兵隊が出てきた。

—おい、何だ?— その意味ありげな笑いに私は問うた。

—とても、・・・すばらしき眺めなりけり—

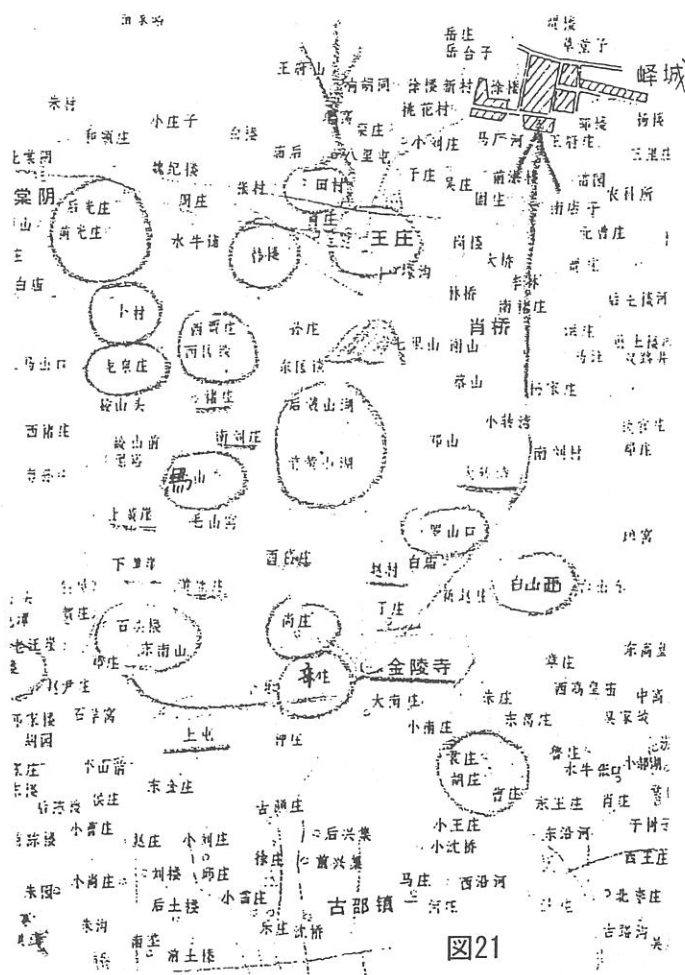
と彼らは笑い声で言うと、私の前を過ぎて行った。私はそこに何があるのか理解できた。兵士たちのこうした笑いはある特種な場合しか、彼等の顔に漂わない。ひょっとすると、奴等は事を終えてきたのかも知れない。と考えながら、私は理由もなく、甘くだらける温もりを覚えながら行って見た。広い庭を通って奥まった家に行くと、重い分厚い木の戸は堅く閉じていた。だが、内部からこみあげる笑いと話し声が聞こえた。静かに開き戸を開けて私は入り、また戸を閉めた。さも秘密のように。

突き当たりの部屋に老婆が子どもを抱いて、おびえきっていた。彼女は顔をしっかりと伏せて怖いものを見まいとしていた。右の部屋に二人の兵が煙草を吸いながら、とにかく嬉しい!という顔つきで立っていた。彼等の前にはすばらしき眺めがあった。

一つの寝台に三人の姑娘が股を開いて座っていた。中の女が美しかった。彼女たちはズボンを脱いでいた。いや脱がせられていた。この三人のうちでも、ともすれば羞恥に居ずまいを正そうとする女もあるが、命ぜられるままに行為する女もある。彼女たちはすっかり恐怖にうち震えている。

奇異ではあるが、戦線至る所で見える光景だ。兵士は若い女を発見すると必ずこうして看々をやる。そして好色な兵士は遂に女を犯す。あくどい兵は暴露することを恐れて、犯した女を殺す。

看々をしている二人の兵は、三人の



姑娘の露骨な姿をつくづく眺めて、品定めをしている。そして、先へ入った兵が彼女たちを犯したと話していた。

私は外へ出た。これほど疲れきっているのに、よくも女を犯すだけの精力の持ち合わせの兵もあるものだ、と私は感心した。若い兵士は、若い男は、どのように疲れていても、女の顔を見ると一度に疲れが癒えるものとみえる。

汗臭い泥臭い男ばかり見ている兵士には、たまさかの女の発見は言い知れぬ好奇であり、満足であり歓喜であるのだ。伝え聞いた兵が次から次へ女の家へ走っていく。行軍にへたっている兵も、この時ばかりは元気よく走る。

東さんは、碭山から隴海線にそって徐州へ向かう。徐州一番乗りを目指す、13師団に先を越されていた。

7) 中支那派遣軍の徐州戦

—「麦と兵隊」(火野葦平) から—

中支那派遣軍は、4月13日、蘇州付近警備の第9師団を鳳陽(蚌埠東南20軒)付近に、第13師団は蚌埠、懷遠間に集結を下命していた。そして、4月24日、「中支那派遣軍徐州会戦計画」を策定した。会戦計画によれば、「軍ハ第9師団、第13師団併列シ、先ヅ前面ノ敵ヲ撃破シテ、神速ニ趙家集(懷遠西北約百軒) — 蒙城ノ戦ヒニ進出ス、此際重点ヲ左師団ニ保持ス 趙家集 — 蒙城ノ線付近進出後、歸徳、亳県方面、碭山、永城方面、若クハ徐州方面何レニ前進スベキヤハ状況特ニ徐州方面ノ敵情ニ即応シ之ヲ決定ス、右何レノ場合ニ於テモ一部ヲ以テ宿県付近ヲ占領セシム」とある。

第9師団は(約三大隊残置)4月中旬南京対岸の浦口に集結、第13師団も5月3日までに所定地区に集結。他方中支那派遣軍は101師団に対し、徐州南東方面からの陽動、攪乱作戦の目的で埠寧方面への進軍を命じる。

火野葦平は中支那派遣軍の陸軍報道部の訓令を受け徐州戦に従軍することになる。5月4日午後4時半、南京駅着。5月5日長江を渡り浦口へ。浦口駅から津浦線の貨物列車に乗って蚌埠に向かう。蚌埠からは、火野は軍報道部の車で、新聞社の車を引き連れて戦場へと従軍取材。「麦と兵隊」では、5月8日の項に「中支軍は敵の退路を絶つために南より北進するわけであるが、作戦上のことは省略するが、津浦線に沿って第3師団、蒙城から永城に左に迂回をして第13師団荻洲部隊、其の中央を第9師団吉住部隊がそれぞれ北進するのだが、その北上軍の中で、最も「面白い戦」が予想され、かつ真っ先に、徐州に入城するであろうと考えられるのが吉住部隊で、軍報道部の主力や各新聞の従軍記者も全機能を挙げて同部隊と行動を共にする、ということであった。」と記されている。

従って「麦と兵隊」は第9師団の徐州戦従軍小説である。火野は第18師団の伍長として、1937年11月5日の第十軍の杭州湾上陸と、その後の上海戦、そして杭州占領戦に参加。その後、18師団を除隊し作家として従軍することになる。その従軍作家としてのデビューが徐州戦となった。

火野は日記風に従軍記を綴る。どちらかと言えば、淡々と戦場の様子を記しているように思える。つい、数ヶ月前までは、南京近郊から踵を返して、第101師団と杭州先着を競って、行軍に行軍を重ねた下士官であった。

5月9日、兵隊はものも言わず行軍していく。話しかけても、怒ったような顔をしてろくに返事もしない。小休止になると、埃の中だろうが、馬の糞の上だろうが、投げるように仰向けにひっくり返ってしまう。背囊には何日か分の米を入れた靴下を括り付けてある。背囊の中にはぎっしり入組品が詰まっているに違いない。弾薬や手榴弾も入っているだろう。ひっくり返った兵隊は一寸の間も惜しむように、足を伸ばし、肩を緩め、一口のさめた湯を水筒から口の中に大事そうに流し込む。炎熱の行軍の中で1杯の水筒ばかりが頼りである。見渡す限りの麦畑ばかりでクリークは非常に少なく、たとえあっても溷濁(こんたく)した水は呑むことが出来ない。朝、沸かして水筒に詰めた湯を一日大事にしなければならぬ。前進。又も黄塵の中の行軍が続けられていく。背囊の負革が肩に食い込んでくる。銃は右に担ったり左に肩を換えたりするが、背囊は下ろすわけにいかない。胸が緊る。弾ね上げる。一寸楽になる。また肩に食い込んでくる。兵隊はそれでもなんでもなような顔をして、進んでいく。黄塵を被り、土人形のようになり、汗に濡れ、歩いていく。この麦畑は正に恐るべきものである。大麦、燕麦、小麦など、ただ茫漠たる麦の海で、これから先何処まで続いているものやら想像もつかない。これは単に麦を植えるとか耕作するとか云うような、生やさしい感じではない。この一本一本はことごとく支那農民の手によって種まかれ、育てられたに違いないが、見渡していると、盛り上がってくるような土のすさまじさに圧倒されそうになる。私は蚌埠難民大会で見た村代表の百姓達を思いだした。あの鈍重な不屈の表情と八角金盤(やつで)のように広くて大きい掌とがこの麦畑を完成した。それは大地そのものである人間のみが初めて成就し得ることである。

孫圩(そんう)城では火野は、新聞社の従軍記者ともども激しい戦闘に投げだされるが、この情景も、実にリアルに描く。そしてこの孫圩戦について書かれた新聞記事 — 「・・・敵兵数百は小嶺にも夜陰に乗じて裏門より孫圩城内に進入し・・・、然るに生意気にも敵は堅固なる城壁を頼みとして・・・」といった講談調のヨイショ記事を紹介して「私はこの記事を読み、なるほどと思って苦笑した。」と書き綴る。

ところが、最後に来て論調が劇的に変化する。

私は祖国という言葉が鮮やかに私の胸の中に膨れ上がって来るのを感じた・・・

命の惜しくない者は誰も居ない。私も人一倍生命が惜しい。生命こそは最も尊きものである。然る

に、この戦場に於いて、何かしら、その尊い生命を容易に棄てさせるものがある。多くの兵隊は家を持ち、子を持ち、仕事を持っている。しかも、この戦場に於いて、それらのことごとくを容易に棄てさせるものがある。棄てて悔いさせないものがある。多くの生命が失われた。然も、誰も死んではない。何にも亡びてはいないのだ。兵隊は、人間の抱く凡庸な思想を乗り越えた。死をも乗り越えた。それは大いなるものに向かって脈々と流れ、もり上がっていくものであるとともに、それらを押し流すひとつの大いなる高き力に身を委ねることでもある。又、祖国の行く道を祖国とともに行く兵隊の精神でもある。私は弾丸の為にこの支那の土の中に骨を埋むる日が来た時には、何よりも愛する祖国のことを考え、愛する祖国の万歳を声の限り絶叫して死にたいと思った。私は、この脈動する莊嚴なる波の中に置かれた一粒の泡のごとく、石榴の丘に立っていた。

やはり、“戦意高揚”は欠かせない文脈であるのであろう。この項を火野は自ら進んで書いたのか、指示されて書いたのかかわからないが、従軍小説としては必要不可欠の項であるのであろう。しかし、火野は最後にバランスをとろうと苦心したように私には思える。

奥の煉瓦塀に数珠繋ぎにされていた三人の支那兵を、四五人の日本の兵隊が衛兵所の表に連れ出した。敗残兵は一人は四十位とも見える兵隊であったが、後の二人はまだ二十歳にも満たないと思われる若い兵隊だった。聞くと、飽くまで抗日を頑張るばかりでなくこちらの問いに対して何も答えず、肩をいからし、足をあげて蹴ろうとする。甚だしい者は此方の兵隊に唾を吐きかける。それで処分するのだということだった。従いて行ってみると、町外れの広い麦畑に出た。こちらは何処に行っても麦ばかりだ。前から準備してあったらしく、麦を刈り取って少し広場になったところに、横長い深い壕が掘ってあった。縛られた三人の支那兵はその壕を前にして坐らされた。後ろに回った一人の曹長が軍刀を抜いた。掛け声と共に打ち降ろすと、首は毬のように飛び、血が觥（ささら）のように噴き出して、次々に三人の支那兵は死んだ。私は眼を反らした。私は悪魔になってはいなかった。私はそれを知り、深く安堵した。

結局のところ、第9師団は徐州の手前でUターンする。徐州に一番乗りするのは第13師団となった。「徐州にこの部隊が入城しないというので新聞記者の悄れていることは見るも哀れなほどである。糧秣受領のトラックに便乗して大朝（大阪朝日）が三人喜び勇んで出かけて行った。」

8) 徐州戦とは何だったのか

この徐州戦を中国側はどのように総括しているのか。「対日戦争史録」は、次のように記す。

5月上旬日本軍の八個師団及び付属部隊20余万人は、多くの戦闘機や戦車の援護のもとに、南北の両側から全面的に展開して、徐州一帯の中国軍を包囲する態勢をとった。第5戦区の中国軍は絶えず抵抗したにもかかわらず、日本軍を阻止することはできなかった。5月15日、国民政府軍事委員会は緊急会議を開いて、日本軍との決戦を避け、徐州を放棄して、力の保存を図るこ

とを決定した。5月19日、中国軍は徐州から撤退した。第5戦区の40数万部隊の中で、小部分を蘇北（江蘇省北部）、魯南（山東省南部）に残したほか、主力を5つのルートに分けて、徐州の西南に向けて突破した。日本軍の戦闘機の爆撃や機械化部隊の奇襲を防ぐために、各部隊は夜間に行軍し昼は隠れるというやり方をとった。自国の国土で移動することでもあり、さらに徐州一帯は広々とした平原なので、日本軍は緻密な包囲や遮断をすることができなかった。そこで6月上旬になり、中国軍は日本軍の包囲を突破した。

日本軍は徐州を占領した。しかし、日本軍の包囲網は中国軍により突破された。中国の軍民は多大な損害を蒙ったが、それは日本軍とて同じだった。北支那方面軍・第2軍の戦死者は7452名に達した。

徐州戦への日本軍の集中は、他の地域での抗日戦争をより活発にする結果をもたらした。山西省に駐屯する第20師団は、苦戦を重ね補給路を絶たれ、糧食絶無の状態に陥った。その反応として、山西省における八路軍の活動はより活発になった。

総じて言えば、徐州戦で日本軍の戦面は拡大し、持久戦の泥沼にさらに一步踏み込むことを結果したと言えるのであろう。